

合う。

(記)

〔タイム〕

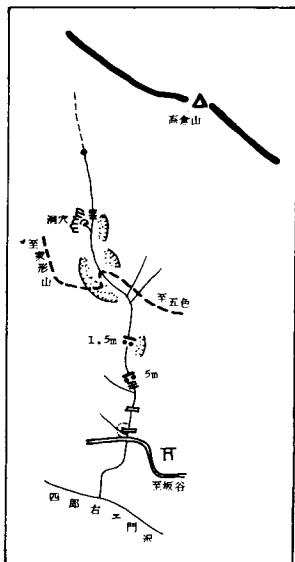
出合七・一五―四郎右エ門沢九・〇五―登山道一・
一〇―沢終了一三・〇〇―登山道一三・一五―家形山一
四・〇〇

山神沢 (仮称)

一九八〇年十月二十六日

◆天気(小雨のち曇、一時ミゾレ)

一九八〇年最後の沢登りはミゾレにあうあいにくの天
気であったが、一時間にも足りない山行であったため、
あまり寒さを感じることもなく終了した。



山神沢 (作図:)



山神沢 (仮称) を遡る

車で板谷鉱山までゆき、沢近くの神社で身仕度を整え
る。沢に入るとすぐ砂防ダム。これを越えた所でワラジ
を付ける。

砂防ダムをもう一つ越えたとすぐに滝。この沢唯一の
滝といえる滝で五メートル程。右岸を登る。

次の一・五メートル滝を越えたと二本のパイプが沢を横切っ
ている。左岸から小沢が二本入ると今度は登山道が横切
る。五色温泉と家形ヒュッテを結ぶ登山道だ。右岸のガ
レ場をのぼっていつている。

少し遡ると、右岸のガケの間から水が流れ出ていた。

良く見ると、昔の鉱道で、水はそこからくるものだ。入口は人が入らないようにふさいである。水もにがくて飲めたものでなかった。

兩岸から木々がかぶさってきて、水も漸減した。水がなくなった所で引き返すことにする。(記・功)

〔タイム〕

出合八・三〇―登山道九・〇〇―折返し点九・一五―
板谷鉱山一〇・〇〇

赤泥沢 (仮称)

一九八〇年五月二十五日

◆天気(曇時々晴)

林道より砂防ダムに下り、ワラジをつける。少し進むと一五段の滝があり、左岸を捲く。このところにはウドが多数はえており、ザックにほぼいっぱいといった。

一〇時一〇分赤泥沢出合。二段の滝をかけて蟹ヶ沢に合流している。出合すぐ上で二俣になっており両方とも滝をかけている。水量の多い左沢に入る。一五段の滝となっている。ホールドが細く、バランスのよさが要



赤泥沢(仮称)の廻行

求される。三段目と四段目ではトップが登ったあと後続者のためシュリングを出して通過した。

ゴロ口状がしばらく続く。F2は何なく通過。やがて鉄分の多い泥に川底がおおわれ、みな泥だらけになりながら林道に出た。(記・)

〔タイム〕

林道終点・砂防ダム八・四〇―赤泥沢出合一〇・一〇―
F2一〇・四〇―林道一一・五五